

《貝殻節》の教育実践の現状と課題  
－鳥取大学附属小学校の2014年度の実践から－

鈴木慎一郎・大野 桂

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第12巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.12 / No.1

平成 27 年 8 月 21 日 発行 August 21, 2015



# 《貝殻節》の教育実践の現状と課題

—鳥取大学附属小学校の2014年度の実践から—

鈴木慎一郎\*・大野桂\*\*

The situation and the problem in “Kaigarabushi” practice  
: At Elementary school attached to Tottori University in 2014

SUZUKI Shinichiro, OHNO Katsura

キーワード：《貝殻節》，鳥取大学附属小学校，教科書，自分うたふ，コブシ

Key words: “Kaigarabushi”, Elementary school attached to Tottori University, Textbook,  
My music paper, Warble

## はじめに

本稿の目的は、2014（平成26）年度の鳥取大学附属小学校における《貝殻節》の教育実践の現状と課題を報告することである。

生田久美子によれば、民俗芸能の伝承には「民俗芸能それ自体を伝承（教育）するという側面」と「民俗芸能を伝承することを通して主体の学びを拓げていく教育という側面」の2つの教育的側面があるとされる<sup>1</sup>。

地域および附属学校と連携した日本伝統音楽の実践に関する先行研究としては、志民一成が挙げられる<sup>2</sup>。志民は、静岡大学教育学部附属浜松中学校、附属島田中学校、附属浜松小学校等で《ソーラン節》《黒田節》等の日本の民謡を題材とした授業実践を行い、成果を報告する。また、公立学校や静岡県文化財団とも連携をし、実践を展開している。志民は「長唄や民謡を唄うことは、身体感覚を豊かにし、それが充実した歌声へ結び付くことが期待できる」と述べ<sup>3</sup>、「子どもがモデルの声に近付くために試行錯誤する中で、自分の声と対峙し、その可能性を広げていくことをねらい」に置いて実践を進める<sup>4</sup>。そして「我が国の伝統的な歌唱の活動が、単に日本文化の継承に留まらず、それを体験することが表現ツールとしての「声を育てる」ことにつながり、子ども自身が表現者として成長する上で大いなる意義を持つ」と主張する<sup>5</sup>。上記の生田の教育的側面と照らし合わせると、志民の実践は「民俗芸能を伝承することを通して主体の学びを拓げていく教育という側面」に該当する。

一方、佐川馨は、秋田大学附属中学校において秋田民謡を取り入れた授業実践を行い、「学校音楽

---

\* 鳥取大学地域学部地域教育学科

\*\* 鳥取大学附属小学校

における郷土の民謡の学習は、生徒が旋律やリズムなど、西欧や諸民族の音楽とは異なった構成原理の独自性、すなわち民謡固有の音楽的特質に気付くとともに、一定の価値感情が芽生える」「郷土の民謡は、その可変的な性格や即興性により、生徒の実態や教師のねらいに応じて多様な授業の展開が期待できる」点を指摘する<sup>6</sup>。また、佐川は「地域の音楽素材」として「①伝統音楽的素材（民謡、お囃子、わらべ歌など）、②西洋音楽的素材（明治以降の地域出身の作曲家の音楽作品や著作など）、③生涯音楽的素材（地域の音楽家、文化施設、特色ある音楽活動など）」に分類する<sup>7</sup>。これに基づくと、《貝殻節》は①伝統音楽的素材に該当する。

《貝殻節》の教育実践に関する先行研究としては、榊田祐子が挙げられる。榊田は、鳥取大学附属小学校、鳥取市立修立小学校において実践を重ね、その成果を『教育音楽・小学版』（2010.12, 2011.1, 2, 3）の誌面や日本学校音楽教育実践学会（2006）において口頭発表している。この実践の導入では、《貝殻節》の鑑賞を置き、貝殻節名人の歌い方をまねることで、民謡の歌唱の学習を展開している<sup>8</sup>。子どもたちの状況については、最初は民謡に対して余り興味のない音楽、理解しにくい音楽として捉えていたものの、歌詞の意味や背景を理解するにつれて興味・関心が高まり、意欲的に歌うようになったと報告している<sup>9</sup>。このように榊田は《貝殻節》の教材開発を行い、全国に向けて発信している。児童の記録も要所に挙げ、子どもの実態にも目を向けた実践研究である。とはいえ、『教育音楽・小学版』という雑誌の限られた紙幅のため、子ども一人ひとりの状況までの踏み込んだ分析はなされていない。

ところで、筆者の鈴木らが行った調査によると、2013（平成25）年度の鳥取市内の小学校における《貝殻節》の実践の実施率は、59%と、決して高くない<sup>10</sup>。実践されなかった理由として、「時間がないから、教える人がいないから、必要性がないから」等が挙げられている<sup>11</sup>。上記のアンケート調査は、教員対象に行ったが、子ども一人ひとりが《貝殻節》をどのように認識しているかは、《貝殻節》の教材開発をする上で、欠かすことのできない作業である。そこで本稿では、《貝殻節》の教育実践における現状と課題を子どもの意識に着目しながら整理していく。具体的には、第一に、小学校音楽教科書における《貝殻節》の位置付けを概観する。第二に、鳥取大学附属小学校において《貝殻節》の教育実践を実施し、子どもの意識に着目しながら現状と課題を明確にする。

## 1. 小学校音楽教科書における《貝殻節》の位置付け

「小学校学習指導要領」において「歌唱教材については、共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを含めて取り上げるようにすること」と示される<sup>12</sup>。一方、鑑賞に関しては、第3学年及び第4学年において「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じ取りやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲」を取り扱うように示される<sup>13</sup>。このように民謡や郷土の音楽については、表現と鑑賞の両方において位置付けられていることが分かる。

ここでは、小学校音楽教科書において《貝殻節》がどのように位置付けられているかについて概観したい。2014（平成26）年度については、教育芸術社、教育出版、東京書籍の3社から小学校音楽教科書が発行されている<sup>14</sup>。鳥取大学附属小学校では、教育芸術社の『小学生の音楽』が使用されている。

《貝殻節》が掲載されているのは、教育芸術社と教育出版である。教育芸術社では、第4学年で「かんしょう資料 郷土の民謡」の中で《貝殻節》が、藁の衣装を身に付けた女性の写真も加わり、紹介されている（図1）。《貝殻節》の譜例は掲載されず、あくまでも鑑賞として取り上げられている。ちなみに、富山県民謡の《こきりこ》は、譜例もあり、表現活動としても取り扱われている。

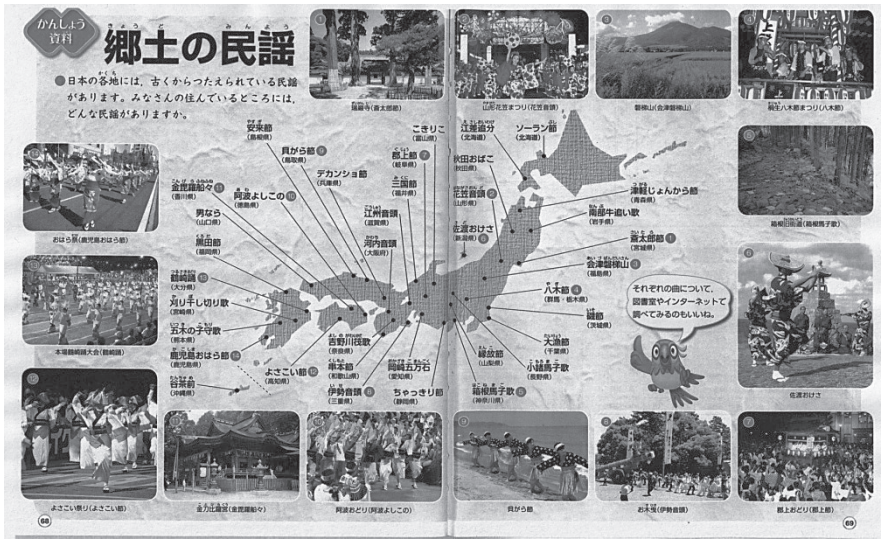


図1 『小学生の音楽4』教育芸術社，2011年，68-69頁

## 2. 《貝殻節》の教育実践

ここでは鳥取大学附属小学校における《貝殻節》の実践から検証していきたい。

### 1) 実践の概要

《貝殻節》の教育実践は、以下の通り実施された。

- ・実践日時 2015（平成27）年1月22日（木）8時40分～9時25分
- ・実践対象 鳥取大学附属小学校 4年1組 36名
- ・実践者 大野桂
- ・題材名 「民謡の魅力を感じ取ろう」
  
- ・学習計画 （全6時間）
  - 第1時 いろいろな民謡（アジアの民謡を4曲鑑賞：拍子ある、なしに気付いたり、民謡とは何かを考えたりする）
  - 第2時 民謡で日本旅（民謡とは何か、日本の民謡を14曲鑑賞し、民謡についての共通項を感じ取る）

第3時 鳥取県代表の民謡《貝殻節》(うたって民謡の特徴に気付く)(本時)

第4時 もっと《貝殻節》を知ろう(歌詞の内容をイメージしながら、名人そっくりをめざす)

第5時 もっと《貝殻節》を知ろう

第6時 民謡について(まとめ)

- ・本時の目標 《貝殻節》をまねたり、歌詞譜に書き込みを加えたりする活動を通して、民謡の特徴(声の震え、掛け声等)を捉えることができる。

本時の授業は、導入において本時のねらいを確認の後、CDを聴きながら歌詞譜に書き込みを加えて、自分なりの「自分うたふ」を作成した。使用したCDは、教科書の教師用指導書セットに含まれる鑑賞用CD(教育芸術社、DC T-2206)とし、三味線、尺八、和太鼓に合わせて民謡歌手の原田直之<sup>15</sup>が歌う(囃子は女性が歌う)、音源である。その後、「自分うたふ」についての発表をし、《貝殻節》の特徴を共有した。さらに「自分うたふ」を見ながら、繰り返しCDを聴き、それに合わせて歌う活動を通して、《貝殻節》を習得していった。

観察の方法としては、筆者の鈴木が行い、手書きのメモと音楽室後方に設置した1台のビデオカメラで収録した。後日、文字起こしを行い、授業記録を作成した。

上記の質的研究に加え、授業の最後に36名の子どもたちを対象に《貝殻節》に関する簡単なアンケート調査を実施した。

以下、《貝殻節》実践の直面している現状と課題を整理するために、上記の資料に基づき、考察したい。

## 2) 《貝殻節》実践の実際

授業の開始は、あいさつの後、マスクをしている子どもが多いため、「風邪、予防の人？」と大野の問い掛けから始まった。大部分の子どもは、予防のためにマスクをしていたが、10名程度は喉の不調を感じていた。大野自身も花粉症のため、やや声が出しづらい状況であった。1月ということもあり、子どもも教師もやや声が出しにくい状況において《貝殻節》の学習が展開された。

本時のめあては、前時の子どもの実態を受けて、「自分うたふでめざせ貝がら節名人」と設定され、その後、大野により「そっくり」を追加する修正が加わり、「自分うたふでめざせ貝がら節そっくり名人」となった。

T おはようございます。

C おはようございます。

T 風邪、予防の人？

C (多数、挙手)

T ひいている人？

C (数名程度、挙手)。

T 大野先生は花粉症です。声が出にくくなるので聞き取りにくいかもしれませんが、みなさん

予防だったら、今日は歌を中心にするので、もしよかったら、マスクを外せる人は外してください。

声の調子が悪いなあ？喉が痛いなあ？

C (10名程度, 挙手)

T 無理をしないで。下ろしてください。今日は「民謡に親しもう」の3時間目ですよ。いっぱい聴いてきたのですけれども、今日は実際にみんなで歌ってみて、それで民謡ってこんな音楽のことだよねということを感じ取ってほしいなあと思っています。さて普段歌う歌とはちょっと違うということに気が付いた人がいっぱいいたのですけれども、何が違うかといったら、歌の声がなんか違うということにたくさん気が付いた人がいました。声が震えているということを書いた人もたくさんいました。声が何か違う。今日は何回か何回か聴いて、声のどんなところが違うのかなということに、まねっこして気が付いてもらえたらなあと思います。今日のめあては、「自分うたふでめざせ貝がら節名人」(板書)。読んでみてください。どうぞ。

(2015年1月22日 授業記録)

凡例 T：大野，C：子ども，( )：行為，動作等（以下の授業記録においても同様）。

「自分うたふ」は、子どもたちにとって初めての出会う用語のため、大野により「自分で歌う楽譜のこと」と定義付けられた後、次のように説明が丁寧なされた。

T それでは、今から言うことをよく聞いて、「自分うたふ」を作ってもらいたいと思います。メインは歌うことなので、歌うことをメインとしますけれども、歌うためにそっくり歌うために、どうしたらいいのかな。聴いて。声に注目してほしいの(「声」と板書)。声がどうなっているのかということを書き込んで、ただの歌詞カードをこれさえ見れば貝がら節そっくり名人になれるぞ。それ見て歌ったらCDから聴こえてくるような名人さんみたいに歌えるよというような自分の世界に一つだけの歌う楽譜をつくりながら歌ってほしいということです。

意味が分かった人？

C (数名程度, 挙手)

T 分かりませんか？分かりませんか？

では分かった人が何人かいるようなので、まず聴いて、声に注目して、ここはこうなって矢印になるかもしれないで、震えていると感じた人は震わすかもしれないね。そういう自分の記号やマークや。言葉ではない方がいいね、一目で分かるために。そういうものを見つけて、歌ってほしいと思います。歌かけます。いい。それでは何回も聴きたいと思います。

(2015年1月22日 授業記録)

CDの1番だけを聴きながら、子どもたちは「自分うたふ」(図2)を記入していった。4回聴いた後、4名の子どもが指名され、ホワイトボードに自分が記入した記号、矢印、マーク等を書き、発表した(写真1)。

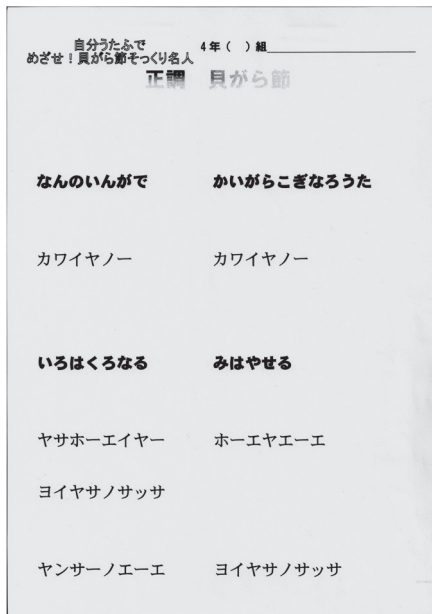


図2 自分うたふ

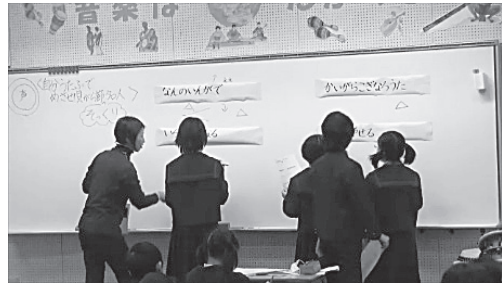


写真1 「自分うたふ」を発表する子ども

大野は「色々なやり方があります。(中略) おもしろいよね。そうやって歌ってみると、そっくりになれるかもしれない。(中略) 自分の記号を使って名人そっくりを目指してください。(中略) 歌ってね」と言い、再度、1番のみのCDを4回流す。「そろそろ歌おうよ」と大野が声を掛けても、子どもたちは「自分うたふ」の作成に夢中になってしまい、思うように声が出てこない。そこで大野が「よし、1段目だけでも、みんなでそっくり名人になりたいと思います」と切り返し、「何の因果で貝殻漕ぎなろうた」の1段目のみのCDをかける。その後、隣の子ともペアを組ませ、聴く側と歌う側に分けて活動を進め、1段目のみのCDを8回、かける。そして「名人と声がそっくりかどうか、どこが違うのかどうかを聴いてみてください」と指示し、1段目のみのCDを再度かけ、子どもに発表させた。子どもの発表の中には、震えや伸ばし等を挙げた気付きもあったが、声が小さい点が指摘された。実際に筆者が聴いても、子どもたちの声はあまり出ていなかった。その際のやり取りが次の通りである。

- T どうしたら大きくなる？  
 C 名人は高い声で歌っていたけど、隣の人は低い声で歌っている。  
 C もっと口を開けてお腹から声を出せば、声は大きくなると思います。  
 T ほとんどの人が気付いていましたが、名人は何人で歌っているのですか。  
 C (考える)  
 T たった一人なのです。  
 C え…、



- T 「かわいやのうのかわいやのう」は、名人が歌っていましたか。
- C (考える)
- T 違う人だよ。名人さんは一人で歌っているのです。もう 1 回、聴いてみてください。  
本当かな、一人かな。
- (♪ CDの1段目)
- T 一人だった？
- C (多数挙手)
- T たった一人で声を出しているのですね。一人勝負なのです。では、もっと練習したら声は大きくなるのでしょうか。あと5回ぐらい練習できるかと思います。グループみんなで、4人で、名人一人に、そっくり目指して立ち向かっていってもらおうかな。では練習いきますよ。
- (♪ CDの1段目)
- (2015年1月22日 授業記録)

本時のめあては「自分うたふでめざせ貝がら節そっくり名人」であった。しかし、そっくりになるというめあてには到達せず、声量が問題になっている。口の大きさやお腹を使う点が子どもから出ているが、大野は「一人勝負」という点を強調し、反復練習を促す。

その後、声量は増し、子どもたちは《貝殻節》を歌うことができるようになった。では、一人ひとりの子どもは、《貝殻節》に対してどのように感じていたのだろうか。次項では、アンケート調査の結果に基づき、検証していきたい。

### 3) 《貝殻節》に対する子どもの意識

授業の最後に36名の子どもたちを対象に《貝殻節》に関する簡単なアンケート調査を実施した。以下はその結果である。

図1は「8月に浜村温泉において行われる「貝がら節祭り」に行ったことがありますか」に対する回答である。「ある」と回答したのは1名(3%)と少数であった。

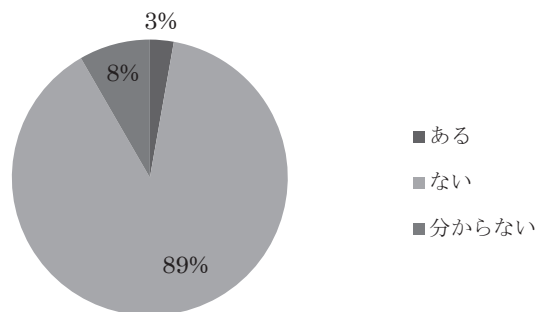


図1 「貝がら節祭り」に行ったことがあるか。

図2は「鳥取県の民謡《貝殻節》を聴くのは好きですか」に対する回答である。19名（53%）が「好き」と回答し、「嫌い」は2名（5%）に留まった。

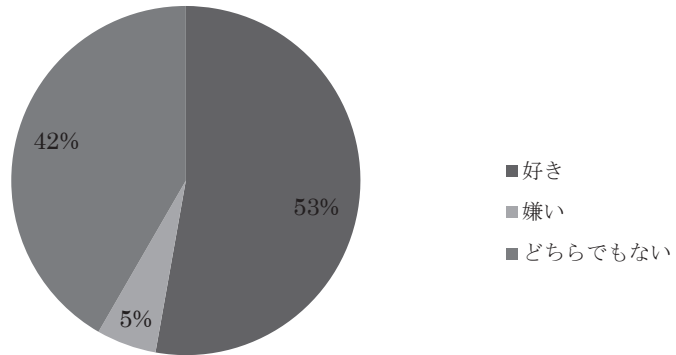


図2 《貝殻節》を聴くのは、好きか。

図3は「《貝殻節》を歌うのは好きですか」の回答である。「好き」が17名（47%）、「嫌い」が4名（11%）となる。

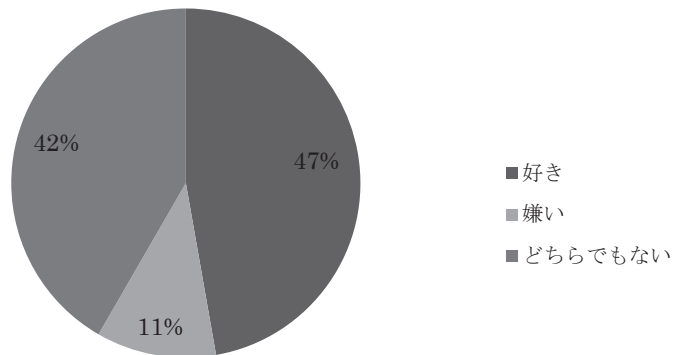


図3 《貝殻節》を歌うのは、好きか。

このように《貝殻節》の聴くと歌うに関して、「嫌い」と回答した子どもは少数で、「どちらでもない」が4割程度を占める。「好き」に関しては、聴く方が若干、高い。《貝殻節》の聴くと歌うと

の関係を一覧にしたものが表1である。《貝殻節》の聴くと歌うとの関係の相関係数を算出したところ、0.293383とやや弱く関連している。

表1 《貝殻節》の聴くと歌うとの関係

歌う	聴く			計
	好き	嫌い	どちらでもない	
好き	70.59 (12)	0.00 (0)	29.41 (5)	100.00 (17)
嫌い	0.00 (0)	25.00 (1)	75.00 (3)	100.00 (4)
どちらでもない	46.67 (7)	6.67 (1)	46.67 (7)	100.00 (15)
全体 (人数)	52.78 (19)	5.56 (2)	41.67 (15)	100.00 (36)

図4は「《貝殻節》を歌うのは難しいですか」の回答である。20名(56%)が「難しい」と回答する。その理由として、後述の表2と合わせて考察すると、「コブシ」等の民謡独特の声の出し方に苦労していたことが分かる。

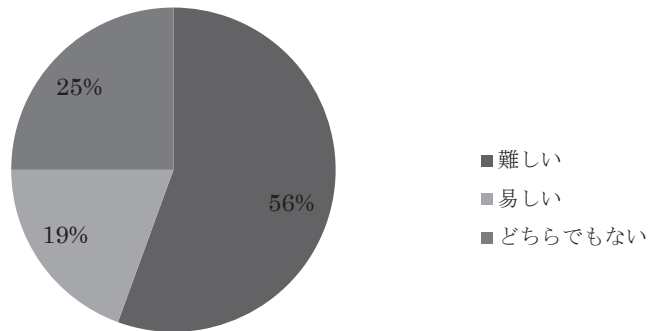


図4 《貝殻節》を歌うのは、難しいか。

このように鳥取大学附属小学校の子どもたちにとって、「貝がら節祭り」は定着しておらず、《貝殻節》を「嫌い」と回答したのは、1割程度と限られ、「好き」の回答は5割程度あった。歌うに関しては、「好き」が47%である一方、「難しい」が56%も占める。では、子どもはどのような点を難しいと感じたのであろうか。最後の設問では「その他、《貝殻節》についての感想を書いてください」と指示した。その自由記述回答を一覧にしたものが、表2である。36名全員の子どもの記述があり、ここから考察したい。なお、表2に掲載するにあたり、誤字脱字や助詞の不自然・不適切な使い方等については、筆者により若干の手直しを行った。また、常体、常用漢字の表記に統一した。さらに「声の感じ」「リズム」「その他」のカテゴリーに分類した。

表2 《貝殻節》についての感想

	声の感じ	リズム	その他
1			掛け声が歌詞を歌っている人とは違うということに驚いた。
2		リズムが取りにくい。	
3	声を上げたり下げたり、震えたりして いて、歌ってみると、少し難しい。	伸ばすところがたくさんあり、難しい。	
4	震えるところが難しい。「かいがら」の 「ら」は小さく歌うので難しい。		歌詞はおもしろい。
5			鳥取市少年少女合唱団で歌ったことがあるが、少し違っていて難しいところもある。
6			知らなかったけど、歌えた。名人になるため頑張りたい。
7			いつもわたしが歌っている曲と違った雰囲気だったので、いいなあと思った。
8	震えるところが難しい。		
9	震えているところが民謡らしくて好き。		
10	震えや伸ばし等、色々な声を使って歌っていることが分かった。	伸ばし	
11	震えたり伸ばしたりするので、少し難しいところもあったけど、上手に歌えた。	伸ばし	
12			一人で歌っているのですごい。
13	歌詞より掛け声の方が多い。		
14	声を震わせるところは簡単で、声は出しやすかった。		
15	声を出すのは簡単だけど、大きさは変えられなかった。		
16	難しいけど、揺れたりくせがあったりして、おもしろい。		
17	難しいのは、声を震えたりしないといけないから。		
18			上手に歌えるようになりたい。
19			旋律はおもしろい。

20		ゆっくりだから、言葉も覚えやすいし、歌いやすい。	
21		伸ばさないとずれるのが <u>難しい</u> 。	歌詞は独特でおもしろい。
22	震える声になっている。		
23			鳥取県の民謡だが、あまり上手く歌えない。
24	声を震わせるのは <u>難しい</u> が、ずっと歌っていると楽しくなった。		
25			歌うとなぜかすっきりした。
26	震えやその他、声の高さ等が <u>難しい</u> 。		
27			母が《貝殻節》の踊りをしていて知っていた。名人になれるよう頑張りたい。
28	名人みたいな声が出なくて <u>難しい</u> 。		
29		伸ばすところがどれくらい伸ばせばいいのかが <u>難しい</u> 。	
30	上げたり下げたりがたくさんある歌。		名人みたいになりたい。
31	震える声や高い声が <u>難しい</u> 。		
32		リズムが取りにくく <u>難しい</u> 。	
33	声の調節ができなかった。		
34			どちらかという音楽ではなく、歌だと思う。
35			何人で歌っているのか分からない。
36			<u>難しく</u> てあまり上手くできなかった。でも、マーク等で分かりやすくてできた。

分類した結果、「声の感じ」18件、「リズム」8件、「その他」16件あり、半数の子どもが「声の感じ」に関心を示していることが読み取れる。「声の感じ」18件の内12件が「震え」を挙げ、民謡の特徴的な歌い方である「コブシ」に着目している。「リズム」に関しては、どれぐらい伸ばしたらよいか難しいという感想があった。「その他」では、歌詞に着目している他、合唱団等で歌った経験がある点等が挙げられている。

「難しい」という言葉の記載は、「声の感じ」で11件（4の子どもは2回使用し、それぞれカウント）、「リズム」3件、「その他」2件あった。「声の感じ」については、前述の通り、コブシが要因で難しいと感じている。このようなことから56%の子どもが歌うのが難しいと感じた結果に結び付いていると考えられる。

## おわりに

今回、小学4年生を対象にCDを用いた《貝殻節》の実践を行った。「そっくり名人」をめあてに実践を展開したものの、予想以上に子どもたちの声量を上げるために時間を要してしまった。子どもは模倣の天才と言われ、物事の習得や吸収が早いことが多いが、今回はそうではなかった。実際に56%の子どもが歌うのが難しいと回答する。なぜ子どもたちは《貝殻節》の旋律を掴むのに時間を必要としたのか。その原因として、以下の点が考えられる。第一に、「コブシ」等の民謡の特徴に歌い慣れていないことが挙げられる。第二に、成人した男性の歌声が録音されているCDを使用したことが挙げられる。《貝殻節》は元々、漁の際に歌う民謡であるため、男性の力強い歌声がふさわしい。しかし、子どもと男性の声では、1オクターブ異なり、音色も異なる。この点が子どもたちの音程感覚を混乱させたと思われる。仮に女性が歌った場合、違った結果になったのではないかと予想される。第三に、「自分うたふ」を作成する活動を同時に課したため、歌う活動よりも聴いて書く活動に集中してしまい、歌の方が後回しになったことが考えられる。

ところで、1933(昭和8)年、三上留吉によって編曲され、コロムビアから発売された《新民謡 貝殻節》は、クラリネット、ヴァイオリン、ピアノ等の西洋楽器により伴奏され、テノール歌手が歌う西洋化された音楽であった<sup>16</sup>。それに対し、今回使用した音源は、三味線、尺八、和太鼓といった日本の伝統的な楽器で伴奏され、男性の民謡歌手が歌い、《貝殻節》の伝統的な側面は維持され、教材化の際の重要な視点である正統性(Authenticity)といった点では問題はない<sup>17</sup>。今回、指導者はほとんど歌わず、CDに頼った実践で進めたが、今後は、指導者も必要に応じて声を出すことも取り入れ、子どもたちが無理なく歌を習得できるよう改善していきたい。また、必要に応じて、外部講師を起用すれば、生の迫力が伝わり、有効であるだろう。

事後のアンケート調査では、《貝殻節》を「嫌い」と回答した子どもが1割程度で、予想以上に少なかった。また、半数以上の子どもたちが歌うことに対して「難しい」と感じていたものの、「コブシ」といった民謡独特の発声の特徴にも気付き、積極的に取り組む側面も見られた。

冒頭で述べた通り、《貝殻節》は教科書に掲載されているにもかかわらず、実践された比率は決して高くない。地域社会の多様化に伴い、本来の継承の姿である口頭伝承で民謡を伝えていくことが難しくなりつつある。だからこそ、学校教育が地域と連携を図りながらその側面を補い、文化の継承を担っていくことが求められる。とはいえ、発声法も異なり、独特の音楽的な特徴を持つ民謡の指導には、教師にとって躊躇が伴う。今後は、今回の鳥取大学附属小学校の現状と課題に基づきながら、《貝殻節》の教材開発と指導法の改善を重ね、子どもの表現意欲を尊重した無理なく実践できる方法を追求していきたい。

## 謝辞

本稿を作成するにあたり、鳥取市立修立小学校教諭の榊田祐子氏から資料の提供の協力を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

## 付記

本稿は、平成26年度鳥取大学地域学部附属子どもの発達・学習研究センターの教育実践部門運営費の助成を受けた。

## 注

- 1 生田久美子「民俗芸能を学ぶ子どもたち：2つの神楽の伝承事例を通して」佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』東京大学出版会，2003年，185頁。
- 2 志民一成「地域および附属学校と連携した日本伝統音楽授業の実践報告：能楽と民謡の授業を中心に」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.22，静岡大学教育学部附属教育実践総合センター，2014年，135-144頁。
- 3 同書，139頁。
- 4 同書，141頁。
- 5 同書，141頁。
- 6 佐川馨「「郷土の民謡」の音楽的価値と教材としての有効性：秋田民謡を取り入れた授業の分析を通して」『音楽表現学』Vol.4，日本音楽表現学会，2006年，41-48頁。
- 7 佐川馨「音楽科教員養成における「地域の音楽素材」活用の試み」『日本教育大学協会研究年報』第30集，2012年，56頁。
- 8 榊田祐子「第4学年 民謡っておもしろい！すばらしい！魅力を発見できる授業づくり：3地元の民謡『貝がら節』に迫る」『教育音楽・小学版』2011年2月号，音楽之友社，2011年，68-69頁。
- 9 榊田祐子「第4学年 民謡っておもしろい！すばらしい！魅力を発見できる授業づくり：4民謡から音楽観を広げる」『教育音楽・小学版』2011年3月号，音楽之友社，2011年，68-69頁。
- 10 太田綾香・大谷美佳・宮脇可南子・安田彩花・鈴木慎一郎「鳥取市の学校教育における《貝殻節》の教育実践に関するアンケート調査報告」『地域教育学研究』7巻1号，鳥取大学地域学部地域教育学科，2015年，74頁。
- 11 同書，75頁。
- 12 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社，2008年，72頁。
- 13 同書，47頁。
- 14 2015（平成27）年度の小学校音楽教科書は，教育芸術社と教育出版の2社から発行されている。
- 15 原田直之 1942（昭和17）年福島県生まれ。  
<http://ha-naog.jp/contents/localnavi1186968895328.html>（2015年5月20日閲覧）
- 16 鈴木慎一郎「三上留吉のライフヒストリーと《貝殻節》：SPレコードによる地域創造のための宣伝歌」『音楽表現学』Vol.12，日本音楽表現学会，2014年，15-26頁。
- 17 「教材化」について奥は次のように言及する。「全ての音・音楽は本来教材として存在するのではない。それらはそれ自体として存在しており，固有の社会的・文化的脈絡の中で息づいている。そのような音・音楽が教材として浮上するのは，それらが学習の目的と方法に合致したときのみである。その時用いられる音・音楽は，期すべき学習に適合すべく，多少とも標準化・共通化された上で，教材化されることとなる」奥忍「「世界音楽」教材に関する問題」日本音楽教育学会編『音楽教育学の展望Ⅱ（上）』音楽之友社，1991年，183頁。

（2015年6月5日受付，2015年6月11日受理）

